

銘木市に見られる北海道産広葉樹材

(11) エンジュ

道総研フェロー 佐藤 真由美



銘木市で「エンジュ」と称される樹種は、標準和名ではイヌエンジュです。植物図鑑等で単に「エンジュ」を索引すると、中国原産の別属別樹種が出てきます。こちらの別樹種のエンジュが日本に導入されたのは仏教伝来の頃で、薬用、観賞用として主に寺院に植えられており、木材として使われることはまずありません。このため、本州以南の林業・木材関係者の間でもエンジュといえば日本在来種のイヌエンジュを指します。本稿は主にイヌエンジュとその木材について述べますが、樹種としては「イヌエンジュ」、木材としては「エンジュ」の呼称を用います。

イヌエンジュは春遅く、他の広葉樹の葉がほとんど開いた頃に、ようやく軟毛に包まれた白っぽい葉芽を開き出すので、そのような時期には目を引きます（写真1）。羽状複葉や香りの良い蝶形の花といったマメ科植物の特徴を備えています。イヌエンジュが属するマメ科の樹種は、熱帯で大繁栄しています。昔から銘木の誉れ高い多様な木材が世界的に流通しており、日本でも唐木として珍重されてきている熱帯アジア産のシタン、カリンや、ギター用材として有名な中南米のローズウッドがマメ科です。熱帯地域で早生樹種として植林されているアカシア・マンギウムやファルカタ（センゴンラウト）など、木材として利用されるマメ科樹種は赤道付近が本場です。一方、北海道の冷温帯気候の下では、マメ科で高木になるのは在来種のイヌエンジュ（樹高15m程度の小高木）と、北米から導入されたハリエンジュ（別名ニセアカシア）くらいです。ハリエンジュは、北海道でも野生化して邪魔者扱いされるほど繁栄していますが、本格的な木材利用には至っていません。銘木市で時々「アカシヤ」として出品されているものは、街路樹等の植栽木か、河川敷等の空き地で育ったハリエンジュと考えられます。林産試験場にも「畑の裏山で太くなったアカシア（ハリエンジュ）を処分したいが、木材として売れないのか」という農家からの相談が寄せられたことがありますが、強度はあるし、美観的にも悪くはないものの、コンスタントにまとまって出材するものでもないので、工業的な使い勝手はいまいちです。現状では、手仕事でやっている家具工房で、自宅用の家具を単品で作ってもらうのが精一杯かな、と考えます。



写真1 イヌエンジュの芽吹き（6月初旬）

エンジュは、数量的に変動はあるものの、毎回銘木市に登場します。展示会場に並んでいるエンジュ原木は小径材がほとんどで、イチイと並んで径級18cm前後が多いため、30cmあったら太いと感じます。（写真2）。この寸法だと、幅のある板が採れないだけでなく、曲がりやねじれも目立つため、工業材料としては扱いづらいのですが、ナラやタモと違って、工芸的な価値が高いと考えられます。



写真2 エンジュ原木（2023年2月）

木材は環孔材ですが、孔圏道管（年輪界に沿って分布する大型の道管）の径はナラやタモと比べると若干小さいので、年輪界は明瞭ですが材面が粗い印象はありません。小径材が多いため実感がありませんが、気乾密度 $0.6\text{g}/\text{cm}^3$ 前後^{2,3)}と、案外重い、硬い木材です。心材が濃褐色、辺材がほとんど白に近い淡黄色で明確に分かれており、このコントラストを活かして、器ものや木彫製品などに二色の材として使われているものをよく目にします。とはいえ、エンジュの辺材は薄いので（写真3）、きれいにツートーンに加工するには技が必要かも知れません。仕入れた原木に合わせて寸法、デザインを考えるのか、作りたいものに合う寸法の原木を探し集めるのか、いずれにしても、規格品の大量生産は難しいと考えます。だからこそ、自然素材らしい、一点ものに近い製品を求める人には、値段に代えがたい魅力があるとも言えます。心材の濃褐色は、他の濃色の樹種と比べても特に濃く、伝統工芸の寄せ木細工にも濃色のポイントとして使われます。



写真3 エンジュ原木木口面（2023年2月）

エンジュ材の特殊用途として筆頭に挙げられる床柱、床框（和室の床の間を仕切る枠）は、お茶席での話題にできるような個性を求めてか、小径木を元々の形を残して使うようなデザインがよく見られます。昔、茶室の施主、大工、指物師などは、思い描くデザインに合う原木を求めて、自ら山を探し歩くこともあったと聞きますが、昨今、そこまでのこだわり、仕事振りを求めることは難しいでしょう。比較的新しい和室の床の間では、エンジュの白い辺材を部分的に残して用いているものもあります。日本の伝統建築の中でも、神社建築などでは神様のお住まいとして真直、真四角で、傷のないものが要求されますが、数寄者の私邸であれば、自然のままの小径木の曲がりや枝コブまでデザインに取り込み、世界に一つだけの造作を前に、客とうんちくを語り合うのが楽しみとなるのでしょう。今どき、本格的な和室を備えた住宅は少なくなっていますが、明治維新以降、欧米文化に染まって

きた日本人が、最近になって、和風好みが若い世代にも見え隠れするようになってきたと感じます。遣唐使の時代に大陸文化に傾倒したあと、唐が滅びてその文化の流入が減ると、平安期の国風文化が台頭してきたように、国際情勢が不穏ななか、遠い記憶に刻まれた日本の文化が呼び起こされるのではないのでしょうか。古式そのままではないにしても、エンジュを使った個性的な内装デザインを提案できるかも知れません。和室の床柱にこだわらずとも、エンジュのつやのある濃色の材面は、オープンキッチンのカウンターや見せ柱などにしても映えると思います。

逆に、製材幅が限られるものの、基礎材質的にはナラやカバに迫る強度を持っているので、小型の道具類、楽器材等としても使われており、小幅であればフローリングにもできます。利用可能な資源量がネックですが、昨今主流である針葉樹人工林施業に伴う派生的な収穫でもコンスタントに出材してきていることには期待が持てそうです。ただ、決して成長が早い樹種ではありません。写真3の原木は、径級26、32cmですが、年輪は100近く数えられ、平均年輪幅は1.5mm前後です。資源量は注意深く管理されなくてはならないと思います。フローリングのように大ロットで生産する工程では、必ず端材が出ます。エンジュのような小径樹種ではなおのことです。日本人は小物使いが上手なので、この端材を無駄なく使い切る工夫の一つがクラフト製品といったところでしょうか。エンジュの背板のツートーンを活かした小物をデザインするのも面白いと思います。

アイヌの人々は、ちょっと油っぽいような独特な香りを持つこの木を病魔除けとして珍重し、祭祀（し）儀礼用から日用品にまで用います。北海道土産の民芸木工品にエンジュ材がよく使われているのも、材色や質感だけでなく、アイヌ文化の伝統にも根ざしていると思われます。ここ数年、コロナウィルス感染症のパンデミックも影響してか、エンジュ材を用いた小物が病魔除けのストーリーを添えて売られているのをよく見かけるようになりました。

■参考文献

- 1) 平井信二：「木の百科，解説編」，朝倉書店，東京，pp. 342-343（1996）。
- 2) 日本木材加工技術協会：「日本の木材」，日本木材加工技術協会，東京，pp. 72-73（1989）。
- 3) 農林省林業試験場木材部編：「世界の有用木材300種」，日本木材加工技術協会，東京，pp.28-31（1975）。